



三医看同窓会報

発行 三医看同窓会編集部 津市江戸橋2丁目 デザイン 株式会社 サラト <http://www.salat.co.jp/>

びあいさつ

三医看同窓会会員の皆様には、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。今年度の役員改選により、同窓会会長の重責を引き継がせていただきました。微力ではありますが、他の役員と協力しながら務めてまいりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

三月に発生した東日本大震災により、甚大な被害がもたらされました。会員の皆様の中にはご自身やご家族が被害にあわれた方もおられるのではないのでしょうか。心よりお見舞い申し上げます。また、災害支援のために現地に赴き、様々な看護活動がされた方も大勢いらっしゃると思います。私の勤務する大学病院からD-I-M-A-T、災害支援ナース、さらに医師・看護師・薬剤師・事務職員などの災害派遣チームなど、被災地への支援活動をさせていただきました。支援活動は、まだまだ継続させてい



同窓会会長
門脇文子

くことが必要であると感じるとともに、あらためて看護職であることの責任と役割の大きさを強く感じています。医療を取り巻く環境はますます厳しい現状ですが、質の高い看護を提供することを中心に置き、柔軟な対策を立てること、「人との繋がり・協働」を大切にしていくことが求められている時代ではないかと思いません。

さて、同窓会の会員数は二千五百人を超えており、看護職としていろんな分野でご活躍の方も多いと思います。同窓会のホームページが開設されますので、ぜひ会員相互の繋がりを深め、情報交換を積極的に行っていきたく考えています。
最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず原稿をお寄せいただきました方々に、御礼申し上げますとともに、皆様のご健康とご活躍をお祈りいたします。

平成22～24年度 三医看同窓会役員名簿

会長	門脇 文子	国立3	会計	内田 花契	学部1
副会長	松尾みち子	県立21	〃	林 暁子	学部1
書記	平松万由子	医短3	会計監査	中西 都	医短8
〃	種田ゆかり	医短6	〃	積 友絵	医短9

東日本大震災への災害支援 ナース派遣の経験から

国立17期生 寺村文恵

海が遠くに見えさえぎるものがない、すべて根こそぎ削り取られ見渡せる土の大地、所々にがれきの山、地面に刺さる家の屋根、電柱のつかえ棒のように立った車、窓ガラスがなく中は真っ暗のマンション、家の塀の横には見上げるような赤い船体。出会う人は迷彩服とヘルメット。高台となつているところには避難所があり多数の人々が不自由な生活をされています。テレビで何度も見たはずの光景でした。私は、東日本大震災の約1カ月後、災害支援ナースとして日本看護協会の要請

をうけ岩手県の病院に派遣されました。東京表参道の賑やかでおしゃれな人々があふれる街中の日本看護協会を出発して約12時間後の眼前、その差に息を飲む状況でした。

派遣された病院は高台であり地震、津波による建物の損傷はなく、ライフラインも回復している状況でした。職員仮眠室の近くには衣類や靴が入ったいくつもの袋が並べてあり、『必要な方は、持ってください』と張り紙がありました。そこで働く看護師も被災者です。避難

所から通い、何もかもを津波で失うという想像がつかない環境、状況で流されてしまった。家族は無事だった。つらいことはたくさんあるけど、みんな一緒だから」と仕事をされていました。救急外来でスタッフの一員として勤務し、看護業務の支援を依頼されました。行うことは救急看護です。ただ、来院、搬送されてみえる方は被災者であり、

家や家財、家族までも失った方々です。診察、治療が済み、帰宅となつても避難所に帰る手段がない、医療費を払うこともできない、集団の避難所に帰って感染対策が可能なのか、家族がいない、そんな調整や手配などもその地域、避難所に詳しい地元の看護師と協力して行うことが必要でした。ストレスで胸痛、腹痛、頭痛、うつなどの症状の来院数が増え、乳幼児や小児までもがストレスによる症状によって来院されていました。

高齢者の患者は「家も息子ら家族もなくなつた、生きているのに何の意味がある」と、身体の治療だけでは支えきれない現状でした。被災という状況を考えそこに生きる方々の心身の被害に気付くこと、予防するという看護の基本となるもの、災害支援の知識だけでなく、いままで培った看護の実践力の重要性を実感しました。

災害支援ナースは、被災地で避難所に被災者と生活を共にし、生活の中で看護を実践し、自立に向けて支援を考え実践する能力が必要です。県看護協会では機会をいただき災害支援ナース育成に携わっています。被災地で生活する方々へ災害支援ナースという形で看護支援活動をしたいという看護師の登録は増えてきています。災害時の特有の知識、技術は災害看護として看護学生のカリキュラムに組み込まれてきています。今後は今回の私の未熟な災害支援ナース活動ではなく、災害時の看護支援能力をもった教育、学習された看護師による実践が行われるこ



とと思います。被災地は復興に向けて動き始めたばかりであり、その健康被害も存在しています。少しずつでも良い方向となることを祈っています。



大学教育の役割

三重大学医学部看護学科地域・老年看護学講座

学部2期生 中西 唯公

現場から母校である三重大学に戻り、修士課程の修了を経て医学部看護学科助教として二年目を迎えた。自分自身が大学で勉強していた頃や現場で勤務していた頃に意識していなかったことに会おうことが多いが、その一つが「カリキュラム」である。教育だけではないが物事には目的・目標があり、目指す像があり、それに応じる教育内容等が組み立てられている。

平成二十三年一月の保健師助産師看護師養成所指定規則等の一部改正に従い、「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」での基本的方針を受けて、現在、大学では平成二十四年度入学生からの新カリキュラムの検討を行っている。

平成四年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の施行等を契機とした看護系大学の急激な増加は質の高い看護系人材の供給を増大させた一方、近年の高齢化社会や



高度な医療、実習における看護行為の制約等、社会や医療を取り巻く環境の変化と学生の多様化にともなう、臨地実習や教育内容の見直し、工夫の必要性の課題が指摘されている(文部科学省ホームページ参照)。私自身、学生の実習指導に携わるようになり、学生の能力や多様性また、とりまく社会や保健医療の環境にとまどうことも多くある。社会ではいわゆる大学全入時代が到来したといわれ、大学教育の大きな課題として、目的意識の希薄化や学習意欲の低下等も指摘され、多様な学生への対応と学士課程で学生が身につけるべき学習成果を明確化することが求められている。

カリキュラムの改正とは目の前の学生の姿を参考にしながら、次世代の学生の能力や背景などを想定しつつ、看護職者として身につけさせたい能力や思考力等を組み込みながら、次世代の教育のための新カリキュラムを構築していく。教育はすぐには効果が見えないという特性があることもふまえ、次世代のカリキュラムを考えるということは教育機関の責任の重さと私たちのアセスメント力や想定力の重要性を感じる。

近況報告

学部5期生 神谷 康広



私は今、消防官をしています。

看護学科を卒業後、三重大学医学部附属病院の胸部外科病棟で2年間勤務をしました。胸部外科病棟は急性期病棟であり、術後ケアや急変が多いため、優先順位を念頭に置いた素早い対応が求められました。2年間という短い期間ではありますが、先輩看護師や先生の指導のもと、それらを身につけることができたと感じます。さらに患者さんからは、病気でなく人を看ることの大切さを教えてもらいました。実際に、術後の後遺症により意思疎通ができなくなった受け持ち患者さんに対して、話しかけながらのケアに努め、時間が少しでもできるとその患者さんとの時間をとるように心がけていました。その患者さんが転院する前日の夜、私が挨拶に行くと、それまでと違って顔を見るなり寂しげに涙を流してくれました。その涙を見て、もつと何か自分にできることがあったのではないかと思う反面、改めて心をこめてケアができたことをありがたく思いました。

看護師という仕事にやりがいがありました。小さな頃からの夢だった消防官になりたく、名古屋市消防局へ転職しました。

消防官になると、はじめの半年間、全寮制の消防学校で

初任科教育を受けます。その間に、座学や礼式、厳しい訓練などを受け、卒業後、各消防署へ配置され実務が始まります。

配置後は救急隊として勤務していました。現在は消防局の防災室というところで、防災計画の見直しを行っています。防災室は、市役所内にある消防の組織で、地震や台風などの災害に対する防災計画や、発災後の災害対策を行う部署です。先日の東日本大震災の影響もあり、毎日終電を気にしながら忙しく勤務しています。

現場で救急隊として活動していた頃、看護師時代に身に付けた心電図の解説や呼吸音の聴取、患者さんへの対応については先輩救急救命士に信頼され、自信を持って対応することができま



した。また、患者さんの不安の軽減に努めることが大切だと学んでいたため、病院に着くまでの間、患者さんに状態の説明やどれぐらいで病院に着くか等、絶えず情報提供をすること、話しかけることを心がけました。今回の会報誌を書いたことで、改めて患者さんを見ることの大切さを思い出しました。現場に戻ったときには、このことを忘れずに実践できる救急隊でありたいと思います。



育児短時間勤務制度を 活用して

学部2期生 大仲真子

三重大学医学部看護学科を卒業してから、8年が経ちました。大病院で看護師として働いたのち、1年5ヶ月の産前産後・育児休暇を取得し、今年6月から育児短時間勤務制度を利用して病棟勤務に復帰しました。現在1日7時間、週4日勤務をしています。

育児休暇中は、常に娘と一緒にだったので、はたして娘が保育園に慣れてくれるか、かぜを引いたときにはどうしたらいいのかなど心配ごとを考え出すときがありました。

しかし、そんな心配と裏腹に、配属された職場には、こどもを持ちながらいきいき働いている先輩看護師さんが沢山いました。「泣くのも初めのうちだけだよ、しばらくすると慣れるよ」との実体験を話していただき、とても心強く感じました。また、さつき保育園の先生方も温かく娘を見守ってくださ

り、はじめは泣いてばかりだった娘も1ヶ月もすると保育園に慣れ、元気に登園するようになりました。

復帰して数ヶ月経ちますが、思い描いていたさまざまな不安は現在のところ杞憂に終わっています。保育園では、娘の新たな一面を見ることもでき、日々



成長を感じます。娘は何度か風邪を引いていますが、お休みにいたり、夫に面倒を見てもらったりしてなんとか乗り越えています。日頃から定時に帰宅できるような職場のスタッフの方々も配慮してくださり、ありがたく思っています。私自身も以前なら仕事のストレスを休日までひきずっていたこともありましたが、仕事のONとOFFを割り切って考えられるようになり、以前よりストレスが減った気がします。

現在働く病棟には、こどもを持ちながら三交代で正規で働く方、育児短時間勤務制度を利用している方、パートとして働く方などそれぞれのライフスタイルに合わせて多様な勤務体系を実践されている方々ばかりです。そのような方々から刺激を受けるとともに、出産・育児を経て職場復帰をしてからは、従前こうあるべきと思っていた仕事への姿勢は変化を示しつつあります。仕事と家庭とがともに充足感を保てるようなワークライフバランスをどのように獲得していけるか、今後とも考え続けることになるでしょう。

ただ、どんなスタイルであっても、患者さまに対する看護には変わりはないはず。患者さまが患者さまらしく、もしくはいい意味で新たな一面を発見できるような看護をしていきたいらと思っています。

ワーク・ライフ・バランス(WLB)の推進で看護職の充実を

県立18期生 水谷良子



東日本大震災並びに度重なる風水害で被災された皆様にお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い復興を心よりお祈り致しております。

また、私の附属病院勤務中は、同窓生の皆様より数々のご指導・ご支援を賜り心より御礼申し上げます。現在は看護協会活動をさせていただいておりますので、紙面をお借りして活動の一端、特に看護職の確保定着推進事業(WLB推進事業)についてご紹介させていただきます。

少子高齢化、医療の高度化や国民ニーズの多様化等に伴い、看護業務が複雑高度化する中、医療・福祉・介護に対する課題が山積していることはご承知のとおりです。日本看護協会実施の「2010病院における看護職員需給状況

調査」によると、常勤看護職員の離職率は11.2%、そのうち新卒は8.6%でした。また、三交代制看護師の月当たりの夜勤回数は8〜9回が28.6%、9回以上も14.3%となっています。長年にわたり看護職はなぜこのようなに厳しい労働環境におかれ、育児や介護、学業等により仕事を辞めざるを得ない状況にあるのでしょうか。今

もなお職員確保に奔走している施設が大半ではないかと憂慮しています。そこで、看護協会ではこれらの課題を解消すべく、病院への多様な勤務形態の導入に取り組むなど、看護職の確保定着事業を推進しています。その成果を生かして、WLB(仕事と生活の調和)一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活等において多様な生き方が選択できる社会の実現に向け活動しています。また、2010年度より看護職が働き続けられる労働環境を整えた職場の増加を目指して「看護職のWLB推進のためのワークショップ」を開催しています。一方、看護協会の働きかけにご理解をいただいた細川前厚生労働大臣の指示のもと、5局長(医政局長、労働基準局長、職業安定局長、雇用均等・児童家庭局長、保険局長)連名で「看護師等の『雇用の質』の向上のための取り組み」について通知が寄せられました。

これは「看護業務が就業先として選ばれ、健康で生きがいを持つて能力を発揮し続けられる職業となること、またそれなくしては、持続可能な医療提供体制や医療安全は望めない」という基本的な考えによるものです。以上のように看護協会では、長年の懸案である看護職の確保定着を目的として、各施設がWLBの考えの基、積極的・主体的に職員教育や待遇改善などの職場環境の整備に努められるよう活動しています。一度看護協会のホームページも覗いてみてください!!



編集委員

医短5回生 井上 佳代
医短5回生 宮村 悦子

